

保育内容「言葉」から「国語」へ  
― 児童文化財としての「お話」の教材研究(二) ―

柴田 奈美

要約

「スイミー」は一九六九年に刊行されて以来、読み継がれている絵本であり、現在、小学校二年生の国語の教科書に採用されている。このことは、読み聞かせの絵本として、また自分で読んで理解する国語の教材として、優れた価値が認められていることを意味すると考えられる。本稿では、教科書に採用されている「スイミー」の、言語表現を分析することによって、その教材の魅力を再確認することを目的とした。その結果、小学校低学年の教材にふさわしく、勇気と知恵と協力とで困難を乗り越えていく感動的なストーリーであり、比喩表現などの多用により、イメージや感性を豊かにさせるために必要な表現が工夫されていることを、具体的に明らかにした。さらに、分析を深めることによって、主題の捉え方が深まっていくことも指摘し、内容に深みのある教材であることも確認した。

【キーワード】 「スイミー」・「国語」・「主題・構想・叙述」

はじめに

「スイミー」(レオ・レオ二作、谷川俊太郎訳)は、一九六九年に刊行されて以来、読み継がれている絵本であり、現在一社(注1)

の小学校国語教科書(二年)に採用されている。読み聞かせの絵本として、また自分で読んで理解し、表現を味わう国語の教材として、優れた価値を認められたものと考えられる。

本稿では、教科書に採用されている「スイミー」の、特に言語表現に注目しつつ、その教材の魅力を再確認することを目的とする。教材は、絵本と同様の教科書に採用された谷川俊太郎の訳によるものを対象とした。研究方法は、「主題」「構想」「叙述」の観点から分析を行い、考察を加えていった。

一、文章表現と主題

まず、「スイミー」の文章表現を、場面ごとに記しておく。

① 広い 海の どこかに、 小さな 魚の きょうだいたちが、  
楽しく くらして いた。

みんな 赤いのに、一びきだけは、 からす貝よりも 真っ黒。  
およぐのは、だれよりも はやかだった。

名まえは スイミー。

② ある 日、おそろしい まぐろが、おなかを すかせて、すご

いはやさで ミサイルみたいに つつこんで きた。  
一口で、まぐろは、小さな 赤い 魚たちを、一ぴきのこ  
ろのみこんだ。

にげたのは スイミーだけ。

スイミーは およいだ、くらい 海の そこを。こわかった。  
さびしかった。とても かなしかった。

③ けれど、海には、すばらしい ものが いっぱいあった。おも  
しろい ものを 見る たびに、スイミーは、だんだん 元氣  
を とりもどした。

にじ色の ゼリーのような くらげ。

水中ブルドーザーみたいな いせえび。

見た ことも ない 魚たち。見えない 糸で 引っぱられて  
いる。

ドロップみたいな岩から 生えて いる、こんぶや わかめの  
林。

うなぎ。顔を 見る ころには、しつぽを わすれているほど  
ながい。

そして 風に ゆれる もも色の やしの 木みたいな いそ  
ぎんちゃく。

④ その とき、岩かげに スイミーは みつけた、スイミーのと  
そっくりの、小さな 魚の きょうだいたちを。

スイミーは 言った。

「出て こいよ。みんなで あそぼう。おもしろい ものが  
いっぱいだよ。」

小さな 赤い 魚たちは、答えた。

「だめだよ。大きな 魚に 食べられて しまうよ。」

「だけど、いつまでも そこに じつと して いるわけには

いかないよ。なんとか 考えなくちゃ。」

スイミーは 考えた。いろいろ 考えた。うんと 考えた。

それから、とつぜん、スイミーは さげんだ。

「そうだ。みんな いっしょに およぐんだ。海で いちばん  
大きな 魚の ふりをして。」

スイミーは 教えた。けっして、はなればなれに ならないこと。  
みんな、もち場を まもる こと。

⑤ みんなが、一ぴきの おおきな 魚みたいに およげるように  
なった とき、スイミーは 言った。

「ぼくが、目に なるう。」

朝の つめたい 水の 中を、ひるの かがやく 光の 中を、  
みんなは およぎ、大きな 魚を おい出した。

たぐさんの兄弟たちと平和に暮らしていたスイミー。ところが、  
ある日、まぐろが襲いかかり、兄弟たちを全て食べてしまい、スイ  
ミーはひとりぼっちになる。さびしく悲しい思いをしたが、海に生  
きるさまざまなものに出会って、元氣を取り戻す。そして、兄弟と  
そっくりの魚たちに出会い、皆の生活を脅かす大きな魚に立ち向か  
う決心をする、スイミーは知恵を絞り、皆と協力することで、大き  
な魚を追い出した、というストーリー。

一読、主題は「知恵と勇気を出して協力することによる困難の克  
服の喜び」を直観できる。分析を深めたうえで、再考したい。

## 二、構想

スイミーの状態が目まぐるしく変化するストーリーである。スイ  
ミーの置かれた状態によって、次の五段落に分けたい。

- 1 仲間と楽しく暮らすスイミー
- 2 ひとりぼっちのスイミー
- 3 元気をとりもどしたスイミー
- 4 知恵をふりしぼるスイミー
- 5 成功したスイミーとその仲間たち

### 三、叙述

段落ごとに言葉に着目して分析を行い、理解を深めていく。

- 1、 「広い 海の どこかに」……「どこか」はどこということをも特に決めないで、ある場所をさす。固定的な海ではなく、想像的な海をイメージさせる冒頭文といえる。

「みんな 赤いのに、一ぴきだけは、からす貝よりも、真っ黒」……他の兄弟たちとの違いを強調している「のに」は、予期しない結果に対して意外に思う気持ちの逆接条件を表す。体の色が皆とは違うという個性が、マイナスの意味を強くは感じさせないのは、「小さな 魚のきょうだいたちが楽しく くらしていた」という前文の影響があるためである。

「からす貝」……からすのように黒い貝。「からす貝」そのものを知らなくても、「からす」のイメージから黒色を連想させることができる。

「およぐのは、だれよりも はやかっただ」……個性の一つであるとともに、二場面ですばやく逃げ、助かったのはスイミーだけであるという事件の伏線にもなっている。

「名前はスイミー」「スイミーは」……という表現ではなく、ドラマチックな紹介の仕方である、またこの物語の題名が、主人公の名前であることを明らかにしている。

- 2、 「おそろしい まぐろが」……スイミーたち小さな魚の視点で描かれている。

「ミサイル みたいにつつこんで きた」……速さのすごさ、大きさや威力の大きさの比喩。兵器にたとえることで、より大きな恐怖感が感じられる。

「一口で、まぐろは……のみこんだ」……まぐろと小さな魚たちの体の大きさを対比して想像できる。多くの魚を一口でのみこめる程大きいまぐろ。しかし、スイミーはそのまぐろから逃げることでできていることから、スイミーの泳ぎの速さが窺われる。

「スイミーは およいだ、」……倒置法を用い、「くらい海の そこ」を強調することによって、スイミーの恐怖感と孤独感を表している。

「こわかった。さびしかった。とても かなしかった」……短い表現で、畳みかけるように気持ちを表現。「かなしかった」に「とても」という強調の意の副詞がついていることから、さまざまな感情の中で、きょうだいを失った悲しみが、より強いことがわかる。

- 3、 「けれど、海には すばらしい ものがいっぱい あった」……悲しみに沈んでいたスイミーには目に入らなかったが、海には今まで知らなかった世界が存在していたのである。

「おもしろい ものを 見る たびに、スイミーは、だんだん元気を とりもどした」……いままでに見たこともない生き物に接し、海の中の明るい世界に勇気づけられて元気をとりもどしていくスイミー。孤独を乗り越えて、成長したスイミーの誕生。

「にじ色の ゼリーのような くらげ……」……比喩表現を巧みに使い、海中を色彩豊かに、ユーモラスに描写している。「2」

の場面の「くらい海」と対比的。

「見えない 糸で 引っぱられて いる」……比喻。一斉に同じ向きに泳ぐ魚の様子を巧に表現している。

「うなぎ。顔を 見る ころには」……「うなぎは」もしないところに文体の工夫が窺われる。名詞止めを多用する中に、奇抜な文体を入れ込んで、単調になるのを防いでいる。

4、 「スイミーは 見つけた、……」……新しい仲間を見つけた時の

スイミーの驚きと嬉しさが、倒置法によつてよく表現されている。また、小さな赤い魚への呼びかけの言葉には、自分の見てきたすばらしいものを紹介したい逸る気持ちと、早く新しい仲間と打ち解けようとする気持ちが読みとれる。

「大きな 魚に 食べられて しまうよ」……前半に出てきたまぐろの存在を想起させる。

「だけど、いつまでも そこに……」自然の厳しい摂理を体験したスイミーは、自分たちが生き延びる道は、逃げたり隠れたりすることではないことを学んだ。それを新しい仲間伝えようとする、成長したスイミーの姿が描かれている。

「それから、とつぜん、スイミーは、さげんだ」……いろいろ考えた末に、突如すばらしいアイデアのひらめいたことが窺われる。

「そうだ。みんな いっしょに およぐんだ。」……この奇抜な発想は、一人で海のさまざまな世界を見てきた中で、知らず知らずのうちに身につけた知恵によるものであろう。

「スイミーは 教えた」……集団が力を合わせるからこそ発揮する力と、一人一人に与えられた責任を果たすことよつて生まれる力。これらの力を出すことによつて、小さなものでも大きなものに負けないということを伝えたいのであろう。スイミーのリーダーシップのよく表れた部分である。

5、

「みんなが、一びきの」……すぐに大きな魚のように泳げたわけではなく、何度も練習をして、やっとできるようになったことを表している。一人一人が協力し、集団で何かを成功させようとする時、それだけの努力と時間が必要なのだ。

「ぼくが、目に なるう」……スイミーは、みんなと違う自分の体の色を、個性として発揮できるようになっている。冒頭では、泳ぎが速いという性質によつて、うまく大きな魚から逃げきつたスイミーだが、今回は知恵を使つて、体の色が黒いという個性を生かし、大きな魚を追い出したのである。逃げて生き延びるのではなく、知恵と勇気とリーダーシップによつて生きる力を得たスイミー。また、「目」になるということには、皆を率いて、自ら大きな魚に立ち向かつていくという、スイミーの心意気も感じられる。

「朝の つめたい 水の 中を、」……時間の経過を表している。大きな魚と対決し、長い間スイミーたちは大きな魚として泳いでいたことがわかる。「ひるの かがやく 光の 中を」には、スイミーたちの勝利の瞬間を間接的に伝えている。「朝の つめたい 水の 中を」とともに「2」の場面の「くらい海の そこ」という描写とも対照的である。

「みんな およぎ、大きな 魚を おい出した」……努力が実り、スイミーたちに平和な生活が戻ることが予想される。今回の協力によつて深い絆の生まれたスイミーたちは、単なる群れではない。今後、あらたな試練が生じて、逃げることなく、知恵と勇気を出して、問題を解決していく集団に成長していくであろうと思われる。

おわりに

平易な言葉でありながらも、倒置法・名詞止め等変化に富んだ文章表現であり、言語感覚を磨き、音読を楽しむことのできる教材的価値の充分に認められるものであった。

主人公のスイミーが、さまざまな経験を経て成長し、最後に仲間との協力を得て大きな魚を追い払うというストーリーの展開は、子どもたちに大きな感動を与えるであろう。ストーリーを胸おどらせつつ読み進めていく経験は、各自の自発的な読書習慣につながることも期待できる。

主題に関しては、「知恵と勇気を出して協力することによる困難の克服の喜び」がメインの主題と考えられる。それに加えて、体の色が一匹だけ黒色という、一見プラスの個性とは考えにくい（他者とは一匹だけ違うという設定は、差別やいじめの主題のストーリーに用いられやすい）スイミーの特色が、最後の場面で大きな魚のふりをした魚の集団の目になるという形で大きく役立っている点に注目したい。いかにも長所らしい速く泳げるという性質によって、逃げることはできたが、より積極的な生き方を選んだ時に役立ったのは、意外にも体が黒いという特色の方だったのである。個性をいかに集団の中で役立てていくか、という問題を考えさせる一面であろう。

また、困難に立ち向かう群れは、単なる「楽しく くらす」（第一段落）レベルではなく、知恵と勇気を出し合い、おのおのが責任をもって協力をする集団となり、大きな目標を達成する力を発揮するのだというメッセージも受け止められる。

以上述べたものまでも含む、主題に深みのある物語であることを確認することができた。

注(1) 光村図書

参考文献

松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 一九七三年十月

洪谷孝・市毛勝雄著『実践言語技術教育シリーズ（小学校編）第三巻 スイミー』明治図書出版株式会社 一九九七年八月

日本こどもの本研究会 絵本研究部『えほん子どものための五百冊』一声社 一九八九年八月

二〇〇二年 十月三十一日受付  
二〇〇二年十二月二十五日受理